

英語教育における到達度別クラス編成導入とニーズ分析

馬 場 佐和子

(西九州大学)

(平成15年10月30日受理)

Introduction of Class Organization Based on English Proficiency and an Analysis of Students' Evaluation

Sawako BABA

(*Nishikyushu University*)

(Accepted October 30, 2003)

Abstract

In recent years, the academic level of university students has generally dropped, which has been a matter of grave concern among many university teachers. Also in Nishikyushu University, the poor English abilities of students have become a subject of discussion. We may say that various factors have combined to produce the present situation: the popularization of a university, the drop of a birthrate, the diversification of assessment criteria from multiple angles, and so on. The more direct cause in Nishikyushu University is that English was changed into an elective examination subject for the applicants for Department of Social Welfare Science in the academic year of the 6th year of Heisei. The total number of applicants for the university has been decreasing year by year, and as a result, the number of students who were examined in English has been declining.

What I wish to show in this paper is the following. First, whether students were examined in English or not correlates closely with their basic abilities in English. Secondly, the analysis of students' evaluation shows that the introduction of the class organization based on English proficiency works well to meet diverse needs of students.

Key words : English education 英語教育

class organizaion on English proficiency 到達度別クラス編成

1. はじめに

近年、学生の全般的な学力低下が多くの大学で見受けられ、大学教育への導入のための補習授業をはじめ、様々な対策を講じざるを得ない状況が、緊急、重大な問題として懸念されている。西九州大学においても、学生の英語能力の低下とともに、特に、英語学習に対する意欲の著しい低下が大きな問題となってきた。これには、大学の大量化、少子化による大学の門戸の拡大、また、社会のグローバル化、情報化にともなう学生の意識、関心の多様化に起因して、英語学習に対する姿勢、意欲も多様化しているに加えて、より直接的には、入学者選抜基準の多様化にともなう英語学力試験受験者の減少等、複合的要因が考えられる。このため、学生の英語の基礎学力と学習意欲に極端な二極化がみられ、従来の学籍番号順による機械的なクラス編成維持は極めて困難となった。

本稿においては、入試における英語受験の有無と英語の基礎学力の相関関係、及び、学生による授業評価のニーズ分析を通して、基礎学力の多様な学生に対する到達度別クラス導入の教育効果と学生の反応を探る。

2. 入試における英語受験と英語の基礎学力の相関関係

2. 1 入試における英語受験者数の推移

1学部2学科（健康福祉学部：社会福祉学科，健康栄養学科）から成る西九州大学においては、従来、一般入試において英語は受験必須科目であったが、平成6年度入試より、社会福祉学科において、選択科目への変更がなされた。（健康栄養学科においては必須科目のまま現在に至っている。）平成6年度以降の学科毎の入学者総数に占める英語受験者の比率は、社会福祉学科（以後、社福）においては、平成7年に急激に低下した後、若干、回復したものの、平成10年度の29.5%をピークに低下し続け、平成15年度は12.7%にまで減少した。健康栄養学科（以後、健栄）においては、英語が受験必須科目であるため、英語受験者実数は、社福と比較するとほとんどの年度で社福のほぼ2倍前後であるが、学科の入学者総数に占める比率は、社福と同様、平成11年度の72.7%を境に低下し、平成15年度は29.9%である。

この原因は、まず第一に、社福において英語が一般入試の必須科目から選択科目へ変更されたこと、第二に、両学科に共通する要因であるが、入試形式の多様化により、一般入試受験による入学者自体が減少して、代わって学力試験を課せられない推薦入試やAO入試等による入学者が増加したことがあげられる。一般入試による入学者は、ピーク時の平成9年度は全入学者のほぼ8割近かったのに対して、15年度は3割に満たない状態である。

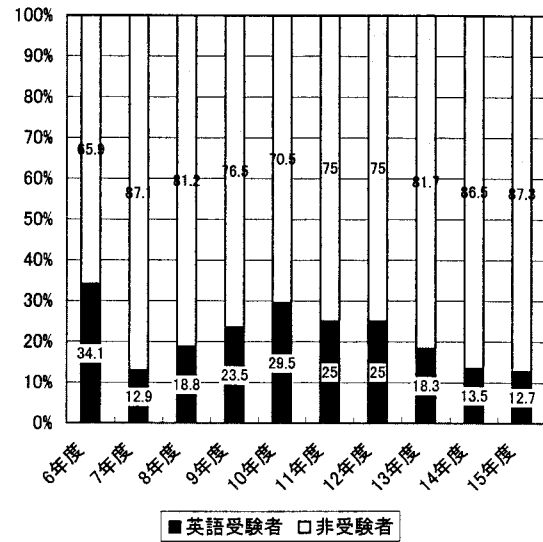


図1：英語受験者の入学者に占める比率（福祉）

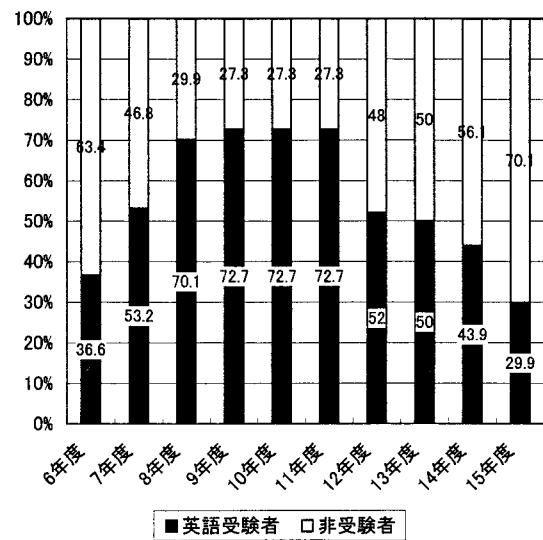


図2：英語受験者の入学者に占める比率（健栄）

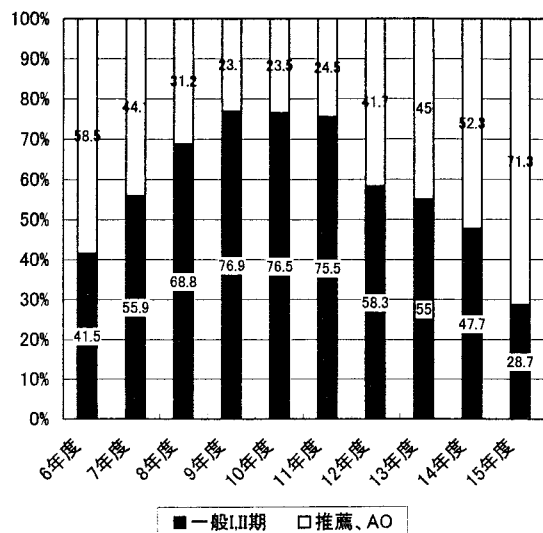


図3：入試別入学者比率（全体）

従って、英語が必須科目である健栄の入学定員が、平成12年度の20名増員（70名→90名）を経て13年度にはほぼ倍増した（130名）にも拘らず、両学科合わせた入学者総数に占める英語受験者の比率を平成6年度以降みてみると、平成10年度の43.2%をピークに急激な低下がみられ、平成15年度にはわずかに20.4%（入学者総数328名中67名）にまで低下した。

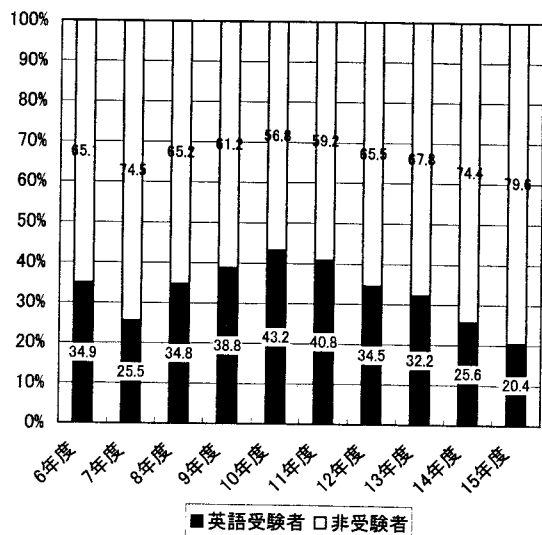


図4：英語受験者の入学者に占める比率（全体）

2.2 到達度別クラス編成の導入

英語の学力試験を経ない入学者の増加は、英検準2級レベル以上の英語能力を保持する学生群と、中学段階のごく初歩的レベルで足踏みしている学生群という、英語の基礎学力の二極化を生じ、従来からの、同一の場所で同一の教育を全ての学生に提供することが、学習者と教授者の双方にとって極めて困難な状況を生み出した。学力のばらつきに加えて、更に深刻な問題となったのは、基礎学力の不足した学生の多くが英語学習に対する意欲が極めて薄く、大学入学後のごく初期段階からドロップ・アウトの可能性が予測され、このことが、クラス全体の熱意と活性化にも影響を与えるという看過できない状況を引き起こしたことである。到達度や興味・関心がそれぞれ異なる学生に対し、同一クラス内でいかに英語学習へ方向付け、教育効果を上げるための動機付けを行うかという課題に対し、50人クラスの実現、多様な教材の使用、視聴覚機材の多用、再履修者用特別クラスの新設、及び学習意欲の高い学生対象に上級英語クラス（選択科目）の新設など、対応が模索されたが、個々人の学習速度とレベルに応じて、できるだけきめ細かい指導を行うための現実的、かつ最良の方法として、平成13年度入学生より、必修科目において到達度別クラス編成の導入に踏み切った。

現時点での英語の必修科目は、両学科とも1年次2科

目、2年次2科目の4単位が必修となっており、専任2人、特任1人、非常勤2人で、選択科目を含めた全英語科目（22クラス）を担当している。また、両学科ともに実験、実習を中心にカリキュラムが組まれているため、時間割が非常に過密である。従って、英語のために確保できる時間割上の枠が限られ、しかも教員数も限られているため、学科を越えて現状（1クラス50人）よりも更に少人数のクラスを多数編成することは難しい状況である。これらの点を考慮して、現時点で最も現実的な方策として、平成13年度は、1年次のみ2段階（上級クラスと基礎クラス）、14年度及び15年度は、1年次3段階（上級クラス、中級クラス、基礎クラス）、2年次2段階（上級クラスと基礎クラス）の到達度別クラス編成を実施した。学生のレベル決定に関しては、入学試験が共通の尺度としての機能を果たせないため、1年次に対しては、入学直後の講義開始第1週目に、2年次に対しては、1年次最後の週にそれぞれプレースメントテストを実施し、その得点によりクラスレベルを決定した。

プレースメントテスト作成にあたっては、専任教員2人でクラス編成にかかわる全作業を、講義開講とほぼ同時進行で短時間内に処理せざるを得ない現状から、採点の効率と客観性を重視して、すべて選択式の設問とし、リスニング能力とスピーキング能力に関わる設問は除外した。テストの難易度に関しては、全体的に英語学習に対して苦手意識を持ち、基礎学力が不足している学生が多いことを考慮して、全設問の3分の1を英検3級レベル、3分の2を英検準2級レベルとした。

2.3 英語受験者のレベル比較

入試における英語受験の有無と基礎学力との相関関係がどの程度みられるかを明らかにするために、13年度、14年度、15年度の英語受験者が到達度別クラスに占める割合を比較した。年度毎に入学者数が若干異なり（13年度社福180人、健栄140人、14年度社福185人、健栄123人、15年度社福181人、健栄147人）、また、各クラスの数も多少のばらつきがあるため、時系列で正確な比較はできないが、各年度、各学科毎の比率を求め、傾向を探ることとした。

社福においては、2段階のクラス編成であった13年度は、英語受験者33人中、上級クラスに属するものは93.9%と極めて高く、3段階となった14年度は、25人中、上級クラスが64%、中級クラスが28%、同じく3段階の15年度は、23人中、上級クラスが91.3%、中級クラスが8.7%で、基礎クラスは0%であった。14年度に上級クラスに属する比率が若干、減少してはいるものの、上級クラスと中級クラスに属する比率を合わせると、14年度が92%、15年度が100%であり、明らかに入試で英語を選択している学生は、英語の基礎学力が比較的高い学生であること

がわかる。健栄においては、13年度は、70人中58.6%が上級クラス、14年度は54人中、上級クラス68.5%、中級クラス22.2%で、15年度は44人中、上級クラス81.8%、中級クラス15.9%であった。

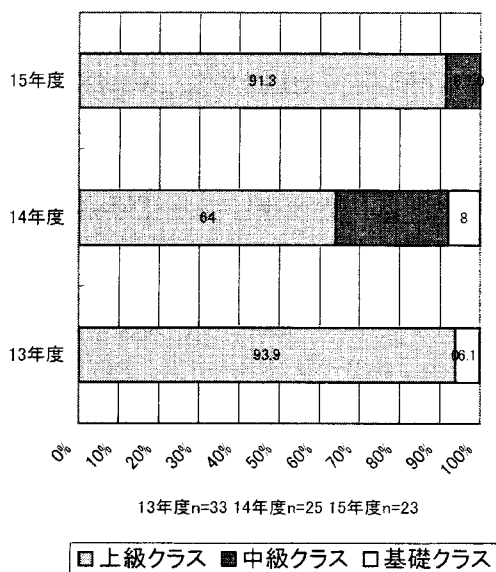


図5：英語受験者のクラス別比率（社福）

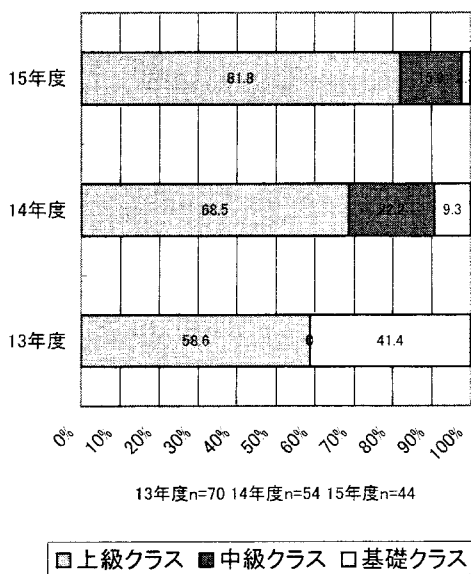


図6：英語受験者のクラス別比率（健栄）

英語が必須科目である健栄においても、ほぼ同様の結果であること、また、両学科合わせた英語受験者総数の中で上級クラスに属する比率も、全ての年度でほぼ7割以上、中級クラスも合わせると9割を超えることから考えると、必須科目、選択科目を問わず、入試における英語受験と英語の基礎学力には強い相関関係があるといえる。

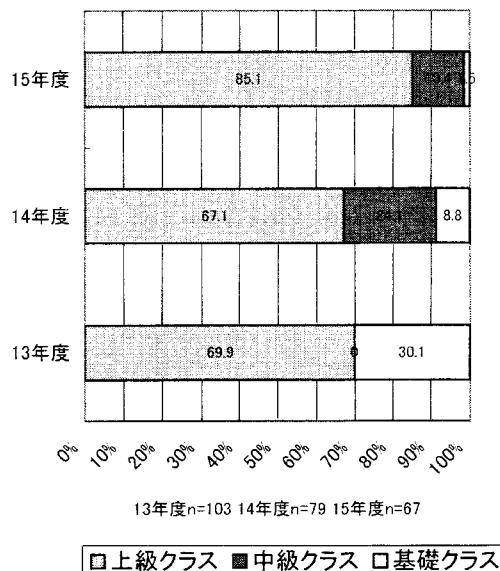


図7：英語受験者のクラス別比率（全体）

2. 4 到達度別クラス編成導入の教育効果

学生の基礎学力低下に対応するため、到達度別クラスの導入とともに、両学科ともレベルに拘らず全クラスで、入学直後の1年次前期の必修科目「英語表現Ⅰ」を、英語の基礎を復習、確認し、英語による自己表現の基盤づくりをするための、実用的な英文法の理解を強化する機会と位置付けた。また、一定の教育内容、教育効果を共通して維持するために、14年度は全クラスで共通テキストを使用し、中間試験、期末試験も共通試験を実施したが、学力や学習速度に大きな差があるクラスで共通テキストを使用することにはかなり無理があり、積極的な意義が見出せなかった。このため15年度は、英語の基礎（英文法）の復習、確認という位置付けは堅持しつつ、各クラスのレベルに応じた教材を、各々のクラスの担当教員が独自に選択して使用することとした。

1年前期の「英語表現Ⅰ」におけるこのような試みに対して、教育効果の有無を測るために、15年度の1年次生に対し、クラス編成のために学期開始時に実施したプレテストを、学期終了時に再び同じ形でポストテストとして実施し、両テスト各々のクラス毎の平均値を比較した。

各クラスの担当教員と各々の教員がとった教授方法の主眼点は次のとおりである。

上級クラス（社福1，健栄1）— A教員担当

基礎レベルの比較的容易なテキストを使用して、文法知識の正確な把握を確実なものとした後、テキストでカバーしきれないより高度な練習問題をプリントで配布し、反復と確認に努めた。

中級クラス（社福1，健栄1）— B教員担当

英文法の体系的理解を正確、確実なものとするため、文法事項、用語の説明を比較的詳細に行い、基礎的知識の整理、定着を目指した。

中級クラス（社福1）— C教員担当

英文法の確認を行う中で、学生の未消化状態と学習意欲の低さを強く感じたため、アニメのビデオを利用して、グループワークで和訳させるなど、英語に対する苦手意識を解消して、英語をコミュニケーション・ツールとして楽しく使用できる基盤の養成に重点を置いた。

基礎クラス（社福1、健栄1）— D教員担当

英語の基礎学力をほとんど有していない学生が大半であること、また、苦手意識が非常に強く、英語学習への動機付けが極めて薄いこと、更に文法事項や用語の知識がほとんど無い昨今の学生の状況を考慮して、説明レベルを中学程度にまで下げ、文法事項、用語の使用は極力控えた。代わりに、初歩的、日常的な言葉での言い換え、説明に努め、(例：名詞＝物の名前、動詞＝動作を表す言葉、接続詞＝接着剤、主語＝“は”、“が”がつくもの、等)、板書やプリントを多用して、理解の整理に努めた。

平均値に最も大きな差が生じたクラスは、両学科ともD教員担当の基礎クラスで、「社福の基礎クラス」では平均点が22.62点から32.86点へ10.24点の上昇、「健栄の基礎クラス」で25.3点から31.43点へと6.13点上昇した。次に上昇が目立ったのはA教員担当の上級クラスで、両学科とも各々、3.95点と0.90点の上昇であった。

中級クラスは3クラスともに平均点が下がり、B教員担当の2クラスは-1.47点と-0.98点、C教員担当のクラスは-3.89点という結果であった。

表1 プレテストとポストテストのクラス別平均値

	①プレテスト 平均点	標準偏差	②ポストテスト 平均点	標準偏差	②-①
上級クラス(社福) A教員担当 47人	58.53	7.04	62.48	6.17	+3.95
上級クラス(健栄) A教員担当 49人	62.70	5.83	63.60	8.55	+0.90
中級クラス(社福) B教員担当 43人	38.40	4.33	36.93	7.14	-1.47
中級クラス(健栄) B教員担当 51人	41.05	2.98	40.07	8.10	-0.98
中級クラス(社福) C教員担当 44人	39.27	4.17	35.38	7.46	-3.89
基礎クラス(社福) D教員担当 36人	22.62	2.17	32.86	5.71	+10.24
基礎クラス(健栄) D教員担当 42人	25.30	3.84	31.43	6.33	+6.13

この結果を上記の各教員の教授方法とあわせて考察すると、上級クラスでは、既にある一定以上の英語能力を有する学生が大半を占めているため、授業が文字どおり復習と確認の機会となり、現有学力の維持と強化という一定の成果が得られたものと思われる。B教員担当の中級クラスは、正確な知識を確実なものにしたいという教員の熱意とは裏腹に、中学、高校において文法用語や術語の使用に慣れていない学生が、伝統的教授法に馴染めなかったのであろう。C教員担当の中級クラスの平均点は3.89点下がっているが、上記教授法にみられるように、基礎学力の強化よりも英語に親しませる方向を重視した授業の結果と推察される。D教員担当の基礎クラスでは、2クラスとも平均点が大幅にアップしている。これは、一つには、基礎学力が低い学生は、適応した学習速度と教授方法の工夫で対応することで、知識吸収量が他のレベルと比較して大幅にアップしやすいためと思われる。また、基礎学力が低い学生の中に、一定の潜在的英語能力は有していながら、これまでの教育のいずれかの段階で苦手意識を増大させてきた学生がかなり存在すること、これに対しては、学力に適応したクラスで初歩的レベルにまで立ち返って対応することで、一定の学力水準にまで引き上げることが可能であることが実証されたと言えよう。

到達度別クラス編成導入以前のデータがないため、従来のクラス編成(学籍番号順)との比較ができず、単純に結論付けることはできないものの、以上の結果から、到達度別クラス編成の導入は、特に基礎学力の低い学生層にとって有効な成果が得られると考えてよいだろう。

3. 学生による授業評価のニーズ分析

到達度別クラス編成を導入したこと、及び、1年前期の必修科目「英語表現I」を英文法の確認と強化の機会と位置付けたことの2点への、学生の反応と満足度を調べるために、15年度前期の最終授業で、学生による授業評価を実施した。質問項目は授業内容に直接関連するものに限定し、英語以外の他の科目にも共通する、一般的な授業スキルを問う質問は除外した。

使用したテキストの難易を問う質問に対しては、「難しすぎた」と答えたものの比率が、中級クラスと基礎クラスで20%前後あるものの、どのレベルのクラスもほぼ80%が「普通」と回答していることから考えて、各レベルに適応したテキストの選択がなされていると考えられる。授業内容を理解できたかどうかについては、上級クラスではほぼ2割強の学生が「よく理解できた」とし、「大体理解できた」を合わせると9割を超えている。これに対し、基礎クラスでは、「よく理解できた」と「大体理解できた」の回答を合わせると7割程度になるものの、クラスで3割の学生が「あまり理解できなかった」と答

えた。特に理解度が低かったクラスは、中級クラスの、前項(2.4)で指摘した伝統的な教授法をとった2クラスで、5割を超える学生があまり理解していないと答えている。英語習得に不可欠な初歩的かつ基本的な用語や術語のみならず、日常レベルの一般的日本語の語彙の知識さえ不足している学生が多数を占める実態を、教員

側はよく認識して、現状に適応した教授方法の工夫に取り組みざるをえないであろう。尤も、「あまり理解できなかった」と答えたものに対しその理由を尋ねたところ、自己責任(「予習不足、勉強不足」、「授業をよく聞いていなかった」)をあげた者が多く、責任を教授者ではなく自己の怠慢に帰している点、興味深い。

表2 授業評価(1)(2-1)(2-2)

	(1)テキストの難易(%)			(2-1)授業の理解(%)			(2-2)理解できなかった理由(複数回答/人)				
	易しすぎた	普通	難しすぎた	よく理解できた	大体理解できた	あまり理解できなかった	教え方が難しすぎた	進み方が早すぎた	予習不足勉強不足	授業をよく聞いていなかった	その他
上級クラス:社福 A教員担当 47人	8.5%	80.9%	10.6%	21.3%	70.2%	8.5%	0人	1人	2人	1人	0人
上級クラス:健栄 A教員担当 49人	10.2	83.7	6.1	22.4	75.6	2.0	0	0	0	0	1
中級クラス:社福 B教員担当 43人	0.0	79.1	20.9	2.3	46.5	51.2	2	4	9	7	0
中級クラス:健栄 B教員担当 51人	2.0	85.7	12.3	2.0	42.9	55.1	7	8	8	1	5
中級クラス:社福 C教員担当 44人	6.8	77.3	15.9	9.1	81.8	9.1	0	0	3	0	0
基礎クラス:社福 D教員担当 36人	2.8	72.2	25.0	0.0	69.4	30.6	0	4	5	1	2
基礎クラス:健栄 D教員担当 41人	0.0	85.4	14.6	4.9	61.0	34.1	3	1	11	0	0

表3 授業評価(3)

	(3)英文法授業の必要性(%)		
	役に立つ	必要ない	その他
上級クラス:社福 A教員担当 47人	85.1%	6.4%	8.5%
上級クラス:健栄 A教員担当 49人	91.8	4.1	4.1
中級クラス:社福 B教員担当 43人	88.4	4.6	7.0
中級クラス:健栄 B教員担当 51人	83.7	2.0	14.3
中級クラス:社福 C教員担当 44人	86.4	4.5	9.1
基礎クラス:社福 D教員担当 36人	77.8	2.8	19.4
基礎クラス:健栄 D教員担当 41人	95.1	2.5	2.4

と答えた比率が非常に高く(最高95.1%、最低77.8%)、学生側も十分に肯定的に受け入れ、満足度が高いことがうかがわれる。

次に、英語学習に対して一般的に学生がどのようなスタンスをとっているかを把握するために、「好き」「普通」「嫌い」のいずれかに回答を求めた。「好き」と答えた者の割合は上級クラスで4割と5割で、これに「普通」を合わせるとほぼ8割であった。これに対して基礎クラスでは、「嫌い」と答えた者が2クラスとも5割を超えており、当然予測されたことではあるが、英語能力の高い学生ほど、英語学習を肯定的に受け入れ、基礎学力が不足する学生ほど、「理解できない→つまらない→意欲がわかない→理解できない」という悪循環に陥っていることがわかる。「嫌い」と答えた者にのみ、その理由を尋ねたところ、中学段階で早くも授業についていけなくなったと答えた者の数が最も多く(84人)、次いで高校段階でついていけなくなったと答えた者が多かった(50人)。一方、「現在」、また「将来にわたって英語が必要とは思えないので興味が持てない」と回答した者は合わせて42人であった。これらの数字から、大学入学以前の英語教育の初期段階でのドロップ・アウトが非常に多いこと、また、英語学習への動機付けに問題を抱え、学習への意欲が持てずにいる学生が多いことが裏付けられた。

英文法の確認、強化のための授業の必要性を問う項目では、レベルにかかわらず全く全てのクラスで、「役に立つ」

表 4 授業評価(4-1)(4-2)

	(4-1)英語の好き嫌い(%)			(4-2)英語を嫌いな理由(複数回答/人)				
	好き	普通	嫌い	中学で授業についていけなくなった	高校で授業についていけなくなった	英語は日常で用いないので興味が持てない	英語は将来で用いないので興味が持てない	その他
上級クラス:社福 A教員担当 47人	38.3%	48.9%	12.8%	2人	1人	2人	0人	2人
上級クラス:健栄 A教員担当 49人	49.0	28.6	22.4	9	5	4	1	1
中級クラス:社福 B教員担当 43人	11.6	32.6	55.8	13	14	2	2	6
中級クラス:健栄 B教員担当 51人	38.8	20.4	40.8	15	6	4	3	2
中級クラス:社福 C教員担当 44人	13.6	50.0	36.4	10	8	6	3	3
基礎クラス:社福 D教員担当 36人	16.7	27.8	55.5	17	8	6	6	3
基礎クラス:健栄 D教員担当 41人	9.8	39.0	51.2	18	8	1	2	4

表 5 授業評価(5)

(5)自由記述(授業に対する感想,意見,要望等)

上級クラス	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい授業だった。 ・プリントで練習・確認できてよかった。 ・基本が多すぎた。レベルをもう少し上げてほしかった。 ・長文も読みたかった。 ・英作文など考える問題もしたかった。
中級クラス	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすく復習できてよかった。 ・単調、一方的な授業だった。 ・小テストや宿題をだして確認ができるようにしてほしい。 ・口頭での説明ばかりでなく、板書してほしい。 ・練習問題をして確認しながら進んでほしい。
基礎クラス	<ul style="list-style-type: none"> ・基本からていねいに教えてくれてわかりやすかった。 ・進度が早すぎた。 ・関連問題をプリントしてくれて練習できてよかった。 ・小テストで確認できた。 ・授業中、あてないでほしい。

最後に、授業に関して、要望、感想などを自由に記述するように求めたところ、授業内容について、あるいは、担当教員の教授法について、肯定的、また否定的な意見、要望、感想が多数寄せられた。比較的多かった感想・要望をレベル毎にまとめると、表(5)のとおりであった。

概して各レベルとも、大学入学後のすぐの時期に基礎に立ち返って復習、確認することについて、「忘れていたところを確認できて良かった」「基本の授業でわかりやすかった」など、比較的肯定的に捕らえている意見が多く、質問項目(3)に対する高い評価が裏付けられたが、既に基礎学力を有している上級クラスに、授業レベルの物足りなさを指摘する意見が若干、寄せられた。全般的に

多くみられた要望は、練習問題やミニテスト、宿題による反復・確認を求めるもので、学生側に、授業における学習内容を自己の責任で復習・確認するための、基本的な自主的/自律的学習スキルが未だ養成されておらず、教員に全てを依存しようとする受動的姿勢が強いことがうかがわれ、懸念される。

4. まとめ

入試における英語受験者比率の推移と学生による授業評価のニーズ分析から、英語の基礎学力の低下と学習意欲の低さは、入試における英語受験の有無と明らかな相関関係を持ち、その対策としての到達度別クラス編成の

導入は、一定の教育効果を生むことができるとともに、学生側からも、一定の満足度を得ていることが実証された。この過程で以下の6点が今後の課題として浮かび上がってきた。

1. クラスサイズの適正化：基礎学力不足により的確に対応するための、到達度別クラスの一層の細分化、少人数化と、過密な時間割、限られた教員数との調整の検討。
2. 基本的日本語の語彙不足と文章読解力低下の実態をふまえた、基礎レベルに対応する授業スキルの工夫。
3. 英語学習への動機付け、方向付けを行うための目標設定：(例) TOEIC、英検等、各種検定試験利用の可能性。
4. リスニング能力、スピーキング能力を含めた総合的英語能力をより正確に測り得るプレイスメントテストの開発。
5. クラスレベルの差を考慮した評価の公平性を保証しうる評価基準の設定。
6. 学生による授業評価に対する教員サイドからのフィードバックの必要性。

大学受験者数の更なる減少が確実なものと予測される中で、今後、入試における英語受験者が幾分かでも増加に転ずる可能性、また、英語の入試必須科目への復活もほとんど期待できない。従って、上記課題に対する対応は、大学教育に相応しい知的レベルの維持と実用的能力養成、また、専門教育との連続性を考慮しつつも、学生の基礎学力不足と学習意欲の欠如への十分な認識を教員サイドの共通の前提として、現実的に展開せざるをえないであろう。

5. 参考文献

- 1) Stewart, Jan E.J. "Curricular and Extracurricular Indicators of Foreign Language Performance." *Annual Review of English Learning and Teaching* 6(2001). 95-110.
- 2) Kanamori, Tsuyoshi. "Current Situation of English Education in Japan : Compared to the Innovations of English Education in Korea." *Annual Review of English Learning and Teaching* 7(2002). 45-55.
- 3) Yamato, Ryusuke. "A Study of Motivation and Strategy in EFL Setting." *JACET BULLETIN* 35(2002). 1-13.
- 4) 安岡高志, 峰崎俊哉, 高野二郎, 香取草之助「授業アンケートにおける学生の達成感と総合評価の関係」『大学教育学会誌』24-1(2002). 123-126.

- 5) 磯田隆啓「教養英語教育の充実を目指した新たな試み」『第51回九州地区大学一般教育研究協議会議事録』(2003). 118-136.

英語表現 I についてのアンケート

あてはまるものに○をつけて下さい。

(1)テキストについて

- 1 内容がやさしすぎた 2 普通 3 内容が難しすぎた

(2-1)授業内容の理解について

- 1 よく理解できた 2 だいたい理解できた 3 あまり理解できなかった

(2-2)上の質問で「3 あまり理解できなかった」を選んだ人のみ、答えてください。

それはなぜですか。一番大きな理由をひとつ、選んでください。

- 1 教え方が難しすぎた 2 授業の進み方が早すぎた
3 自分の予習不足、勉強不足 4 授業中によく聞いていなかった
5 その他 ()

(3)1年前期に「英文法」を総復習することについて

- 1 忘れていたことを確認できるので役に立つ
2 わかっていることばかりなので必要ない
3 その他 ()

(4-1)英語は好きですか

- 1 好き 2 普通 3 嫌い

(4-2)上の質問で「3 嫌い」を選んだ人のみ、答えて下さい。

それはなぜですか。あてはまるものをすべて選んで下さい。

- 1 中学時代に英語の授業についていけなくなったから
2 高校時代に英語の授業についていけなくなったから
3 英語が現在、日常生活に必要なとは思わないので、興味がもてないから
4 英語が将来、必要になるとは思わないので、興味がもてないから
5 その他 ()

(5)授業について、感想、要望など自由に記入してください。